OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コンディヤックにおける「分析」について
Author(s)	高橋, 靖
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1994, 28, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コンディヤックにおける「分析」について

高橋　靖

コンディヤックの『人間認識起源論』(以下『起源論』)は分析 analyse という言語学的方法を提案する。分析は、観念の起源へとたちかえり記号の意味を定める操作である。「認識を得る唯一の方法は、私達の観念の起源にさかのぼり、それらの観念の生成をたどりあらゆる可能的関係の下で観念を比較することである。それは私が『分析する』と呼ぶものである」(E, Ⅰ : Ⅱ ; 67)。コンディヤックによれば、分析された語は正確であり、定義が陥るような循環を免れる。しかし分析には幾つかの問題がある。本稿は分析が抱える問題を考察する。

Ⅰ　観念の分類

分析は観念の操作であるから、コンディヤックにおける観念について予備的考察をしておくのがよいだろう。

『起源論』はロックの『人間知性論』(以下『知性論』)を下敷きにして書かれていて、ロックによる観念と記号の分類は『起源論』に踏襲されている。たとえば単純観念と複合観念について『起源論』にはこう記されている。「単純観念と複合観念との間にふたつの根本的な違いがある。1° 前者の産出において精神は全く受動的である。(中略) 反対に後者の生成において精神は能動的である。モデルに基づいたり選択に基づいたりして単純観念を集めるのは精神である。一言で言えば複合観念は反省された経験の所産に他ならない (後略)」(E, Ⅰ : Ⅲ ; 13)。

複合観念は二分される。「複合観念の内、あるものは様々な知覚から構成されている。ある物体の複合観念がそうである。またあるものは一様な知覚から構成されていて、むしろ何度か繰り返された同じ知覚に他ならない。ある時知覚の数は全然定まっていない。延長の抽象的観念がそうである。またある時は定まっている。たとえば1ピエは12回分のプスの知覚である」(E, Ⅰ : Ⅲ ; 4)。

様々な知覚から構成される複合観念をコンディヤックはさらに二分し説明を加える。ひとつは実体(コンディヤックにおける実体とは物体のことである)の複合観念であり、もうひとつは人間の行為にかかわる複合観念である。「前者(=実体の複合観念)が有効であるためには、実体のモデルに基づいて作られること、また実体に含まれている特性のみを表すことが必要である」(E, Ⅰ : Ⅲ ; 5)。実体の複合観念の形成にとって大切なことは、人間が自然を観察することである。観察によって、物体の持つ特性を抽出し、それらのみから観念を作らなければならない。けれども、物体に見いだされる観念を網羅しても実体の複合観念は完全にはならない。モデルとなる物体をいくら観察してもすべての特性を汲みつくすことは出来ず、人間はそこに新しい特性を発見するからである(E, Ⅰ : Ⅲ ; 15)。このゆえに実体の複合観念は常に不完全である (ibid.)。ただし、観念が不完全であることは、その観念が誤謬であることを意味しない。誤謬は、ある物体に実際には属さない性質をその物体に帰するところにある[1]。他方で、コンディヤックが原型観念 idée archétype と呼ぶ、人間の行為にかかわる複合観念、たとえば「栄光」、「名誉」、「勇気」は、常に完全である。というのも原型観念は実体の複合観念とは異なり、そこに集められる単純観念の過不足がないからである。原型観念はいかなる基体 sujet にも関係する必要がなく、単純観念は人間の選択によって原型観念の内に集められる。

II 魂の諸能力の生成と分析能力

分析が可能であるのは、コンディヤックが制定記号と呼ぶ記号を魂が獲得した後である。『起源論』第一部が論じるところでは、言語と魂の諸能力とは相互作用によって発展していく。記号の助けなしには、魂は分析能力を獲得出来ない。

コンディヤックの「分析」という用語の使用法について注意しておくべきことは、分析が観念と観念とを区別する操作であるだけではなく、観念と観念とを結合する操作でもあるということである。つまり、私達が通常「総合」として理解している操作をも「分析」は意味し、原型観念を分析することは、人がその観念の起源に一旦さかのぼり、その起源に続く諸観念を自発的に結合していく操作である。分析はまた、原型観念の説明、伝達の方法でもある（cf. E, Ⅱ : Ⅱ ; 53)。分析は、複合観念に含まれる諸観念を言い表す énoncer (cf. E, Ⅱ : Ⅱ ; 51) ことによって、その複合観念を伝達する。このように、コンディヤックの「分析」という用語は、その独自の用法の下で理解される必要がある。

分析は想像力内での観念の結合をいったん解きほぐし、様々な観念を新たに結合する。分析は反省能力に支えられている。では、想像力とは、反省とは何か。分析能力は、魂の諸能力の内でどのような位置付けにあるのだろうか。魂の発展に不可欠な記号の考察を絡めつつ、魂の諸能力の生成をたどってみよう[2)]。そして魂の諸能力の生成をたどり終えた時、分析能力の由来について述べようと思う。

コンディヤックは記号を三種類に分け、それぞれ偶然的記号 signe accidental、自然記号 signe naturel、制定記号 signe d'institution（約定記号 signe arbitraire）と名付ける。コンディヤックは一人の人間を想定し、その人間には最初偶然的記号しかないとする。何らかの外的原因

によって、既に見たことのある対象を知覚した時にのみ、その対象は彼の内に蘇る。対象が不在の時には彼はその対象を思い出すことは出来ないが（E, Ⅰ：Ⅱ；37)、知覚された対象は観念として想像力に蓄えられる。想像力は観念相互の結合がなされる場である（cf. E, Ⅰ：Ⅱ；29)。この段階の人間は、外界からの偶然的な印象の支配下にある。自然記号はというと、それは情念を表現するが、情念からの結果にすぎない（E, Ⅰ：Ⅱ；38)。自然記号である叫びを用いて人間が自分の情念を他者に理解してもらおうとする時、叫びはもはや自然記号ではなく制定記号である（ibid.)。制定記号を使用するこの段階に達すると、人間の魂は記憶を獲得する。記憶は記号が貯蔵される場である。記憶を獲得した段階で、人間は想像力を自分の思うように扱い始め（E, Ⅰ：Ⅱ；46)、注意が可能になる。注意を向けることをコンディヤックは「反省する réfléchir」（E, Ⅰ：Ⅱ；48）と呼ぶ。反省能力によって、人間は観念を区別したりそれぞれ別々に考慮したり比較したり出来る。

反省は想像力を支配し、物事の自発的な認識を可能にする。けれども反省は人間の欲求に支配されている（cf. E, Ⅰ：Ⅱ；51)。想像力を自発的に使い始めるといっても、それは偶然的な外的印象による翻弄を逃れるということにすぎない。魂の諸能力は欲求 besoin の支配下にあるのである。欲求は体質、情動、状態から成り、物事と認識との間に介在する。「物事は私達の体質、情動そして状態ともっとも関係している側面から私達の注意を引く」（E, Ⅰ：Ⅱ；14, et aussi cf. Ⅰ：Ⅱ；53)。また欲求は変化する。「たまたま（物事と欲求との）関係が変化すると、私達は対象を全く違ったふうに考え、対象についてまったく反対の判断を下すということが起こる」（E, Ⅰ：Ⅱ；14)。

分析という操作は、欲求によって左右される以上のような言語活動に終止符を打つ手段として導入される。ではその能力、分析能力をどうやって

人は獲得するのだろうか。コンディヤックの分析論が孕む問題点は、分析能力が彼の展開する魂の生成発展についての論述から遊離していることである。『起源論』においては、魂の諸能力の生成についての説明は、感覚から始まって反省まではなされている。けれども分析については、コンディヤックが想定した、例の偶然的記号しか持たなかった人間の魂の場合においては語られないのである。本稿が指摘する非連続性、コンディヤックにおける分析能力と他の能力の生成の非連続性に対して次のような反論があるかもしれない。分析能力は反省能力の一種であって、そのようなものとして論じられている、と。事実コンディヤックにおいて、分析は反省能力の持つ能力、観念を区別し比較しそれらの関連を認識する能力を前提している。しかもその前提である反省能力を、今度は分析能力が自身の部分として含んでいる。しかしそれでもやはり、観念と観念との関係を扱う反省と、物事の起源にさかのぼるという分析固有の能力[3] とは、別物の能力であろう。また、『起源論』では魂のすべての能力は欲求の支配下にあると言われる。しかし分析能力は違う。分析は、欲求による制限を越えた操作であり能力である。分析は客観的である。分析能力の獲得によって、正確さと客観性への道が突然魂に開かれるのである。結局、分析能力はコンディヤック哲学において、その哲学を貫く魂の生成発展論と欲求論からは説明されないのである。

III 操作としての分析の問題

コンディヤックによれば、そこに含まれる単純観念に過不足がないという点で、原型観念、すなわち人間の行為にかかわる複合観念は完全である。しかし、コンディヤックにおいて、原型観念が完全であるということはそれが真であるということを意味しない。また、たとえば「栄光」とは何かについて常に人々の間で見解の一致がみられているわけではない。そこで、

真理を探求し真理を伝達するために、分析という操作が必要とされる。

もっとも、分析には問題がないではない。私達はこれからそれらの問題を考察していく。

A）最初の問題は、分析の持つ観念を結合する力についてである。

さて、『論理学』によると、言葉は誤謬に満ちていて、誤謬は相互に強く結び付き、互いに擁護しあう（L, 398)。誤謬とは、結合すべきでない観念どうしが結合することである。誤謬に対してはその一部に抵抗するだけでは十分ではなく、誤謬は一掃されなければならない（cf. E, Ⅱ：Ⅱ；1)。コンディヤックによれば誤謬を一掃することは魂のあらゆる習慣を一度に変えることである。そして『起源論』によれば、魂は誤謬から解き放たれ得る。デリダが述べたように、コンディヤックにおいて、「人は観念の新しい結合を作ることが出来る」[4]。観念の新しい結合を作りそれを既存の観念結合に代替することが、誤謬を一掃し習慣を変えることである。

分析の例にあたってみよう。原型観念の分析の例として、「勇気」が挙げられる。コンディヤックは次の観念をもって「勇気」を分析してみせる。「『危険』、『危険の認知』、『危険に身をさらす責務 obligation』、そして『その責務を果たす精神の強さ』」（E, Ⅱ：Ⅰ；106)。「危険」がコンディヤックの言うところの「勇気」の起源であり、彼によれば、「勇気」の起源である「危険」にさかのぼり「勇気」に至るまでの観念の生成発展をたどることが分析である（「勇気」の分析は、危険を目前にした人についての物語のようである)。この分析の例は、実は次の一文のすぐ後に示されている。「例えば、人が『勇気』という名をそれがその記号である概念に与えたのは、ただ、他の名により以下の概念を定めた後であった」(ibid.)。分析することは、このように、ただひとつの観念（この場合は「勇気」）に結合する観念の数と質とを定めることではない。「勇気」に結合する「危険」や「責務」といった観念が、「勇気」に先立って分析される必要が

あるのである。分析の開始は、想像力内での広汎な観念結合の改編へとつながっていくのだ。

ただし、このような一連の改編が魂の内で首尾よくなされるかどうかは問題である。というのも、コンディヤックは観念の結合の仕方を、その結合の強さから二つに区別し、人の自発的な観念結合は、教育などによる外的印象による観念結合ほど強くないとしているからだ。分析による観念結合は自発的になされる観念結合の側にある。「観念の結合は想像力においてふたつの仕方でなされる。時に自発的に、時に観念の結合は外的印象の結果に他ならない。前者は通常それほど強くなく、私達は容易にそれらの結合を断ち切る rompre ことができる。それらが人為的であることは同意されている。後者はしばしば非常に強固であり、それらの結合を一掃する détruire ことは私達には不可能である」(E, Ⅰ : Ⅱ ; 76)。

問題は、コンディヤックにおいて、人が(分析によって)新しい観念結合を作ることが出来るといった場合、新しい観念結合が想像力内の既存の観念結合に取ってかわり誤謬を一掃することが出来るのだとして理解してよいのか、ということである。

B) 分析の確実性と正当性についての問題もある。コンディヤックによれば、分析の確実性は、分析が数学的な手続きであるというところにある。コンディヤックは計算の過程の確実さを分析の確実性の理想としている。彼は、もし人に「1000」とは何かと尋ねられたらどうするべきかと自問する。そして、その問いには、単位に単位を加えていき、それぞれの段階に名(記号)を与えていけばよいと答える。ここには明晰な事柄が三つあるとコンディヤックは言う(E, Ⅰ : Ⅳ ; 4)。1)「1」という単位の観念。2)単位に単位を加える操作。3)それに先立つ数とそれに後続する数とから区別する名をある観念に与えたという記憶(「99」と「101」とから区別する '100' という名をある段階の数に与えたという記憶)。人間の行為にか

かわる複合観念の分析にもその三つの明晰な事柄があるとコンディヤックは確信しているのである。

しかし分析の確実性を計算の確実性に求めることが出来るためには、分析の過程が計算の過程と同じである、あるいは分析と計算とは類比関係にあることが条件である。一方で計算は、数回繰り返される同じ知覚からなる複合観念を扱う方法であり、他方で分析は、様々な知覚からなる複合観念を扱う方法である[5]。気付かれるように、コンディヤックは複合観念を二種類に区別しておきながら、その区別を無視し、数学と分析とを同一視して分析の確実性を主張しているのである。

その場合、分析される複合観念に含まれる一連の観念の結合は、計算における単位の加算がそうであるように、「直観的」でなければならない。まず、ロックの『知性論』における「一致不一致 agreement or disagreement」という概念を用いるならば、知とは観念の一致不一致の知覚に他ならない[6]。ロックは一致不一致を、観念の、1)同一あるいは差異、2)関係、3)共存あるいは必然的結合、4)実在、と四種類にまとめている[7]。分析における観念結合にかかわるのは、「関係」である。ロックは、もしふたつの観念の間に「何の関係も知覚出来ず、心が観念を比較するための色々な仕方の内に、観念相互の一致不一致を見いだせなかったら、疑いのない知の余地はまったくないだろう」と言う[8]。そして、彼によると、観念間の一致不一致には、直観的な一致不一致と、介在観念を必要とする一致不一致がある[9]。ロックの用語を用いるならば、分析によって示される一連の観念相互の「関係」は直観的でなければならない。たとえば、コンディヤックが分析してみせた「勇気」に含まれる観念である、「危険の認知」と「危険に身をさらす責務」との一致は直観的である必要があるだろう。問題を明らかにするために、「危険の認知」と「危険に身をさらす責務」という両観念が「勇気」という複合観念に含まれていた観念であると

いうことを忘れてみよう。その場合でも「危険の認知」にただちに後続する観念は、「危険に身をさらす責務」であろうか。危険を認知したらそれを回避することが自然である状況も勿論あるだろう。「危険の認知」と「危険に身をさらす責務」とは直観的対応なのか。

この疑問は、コンディヤックにおける視点という概念によって一応答えられる。視点について、伝達の一環として分析が論じられている箇所を参照してみよう。「人（意味を定めた語を用いようとする人）が自分の考えたことを他者に伝えたいならば、記号を吟味する時に自分自身がいた視点に他者を付ければよく、そうすればそれらの他者は、その人が選んだ語にその人と同じ観念を結び付けるように導かれるだろう」（E, Ⅱ：Ⅱ；13）。注意すべきは、その視点は唯一絶対のものであると考えられることである。視点を複数認めてしまえば、同一の対象についての認識が多様をきわめることになり、原型観念に関する「論争に決着を付ける」（cf. E, Ⅰ：Ⅲ；10）手段としての役割を分析は果たさなくなってしまうからだ。

したがって原型観念の分析による観念結合は、その絶対的な視点によって、必然的である。とはいえ、分析によって私達に伝達されるのは、視点ではなく、原型観念に含まれる諸観念のみである。その視点の正当性、しかじかの観念結合のみを必然的とする視点の正当性の根拠がどこにあるのかについては、分からない。

C）原型観念の分析の場合、まず視点があり、そして分析される状況が設定されるという図式がある。では、分析は状況の何にさかのぼるのか。物体の知覚にさかのぼる、ということはないだろう。物体の知覚から倫理的記述は引き出されそうもない。人間の行為にさかのぼる、ということになるのだろうか。そうとすると問いは、原型観念は何の基体にも関係する必要がないというのに、原型観念の起源として人間の行為があるとはどういうことか、という問いに変わる。勿論人間の行為は基体ではない。だが、

物体の複合観念が基体に属する単純観念のみを含まなければならないように、原型観念もその起源に「関係」する観念のみを含まなければならない。そうであれば、分析された原型観念は人の選択によって作り出される観念であるとはもはや言われ得ないと思われる。分析は物事の起源にさかのぼらなければならない。そして諸観念の必然的対応により、原型観念は獲得される。分析される原型観念には人が選択によって観念を集める余地はなく、原型観念は予め起源によって決定されていることになるだろう。

私達はさらに別の疑問を提示しておきたい。分析される状況とは現実の状況なのかという疑問である。つまり、原型観念を分析することは、人の実際の行為の分析であるのか、あるいは言わば自然法の発見のことなのか、あるいはそれ以外なのか。

この疑問は、コンディヤックが、原型観念は時に実例を実際に見る前に作られることが重要である（E, Ⅰ：Ⅲ；5）としていることから生じる。コンディヤックが言っているのは、分析によって示されるような「勇気」ある行為が地上のどこにもないとしても、それでもその「勇気」は有効であるということだ（cf. ibid.）。もともと、原型観念が分析される必要があるのは、コンディヤックによると、原型観念をモデルとして物事を判断するためであった（ibid.）。原型観念の分析が実例によらないという点で、また原型観念は物事の判断のためのモデルとして必要とされるという点で、原型観念の分析は人の現実の記述、実例の記述ではない。

そうだとすれば、原型観念の分析は人間の本性の記述とでもみなされる他はないようにも思われる。とは言え、コンディヤックは『起源論』の序文に、自分は物事をありのままに見ることを追及するのだと述べ、従来の学、つまり存在の本質や隠れた原因等を見通そうとする学を批判しているのだから、分析は現実を対象とするはずである。また、人の行為は、分析された原型観念において全くのフィクションとして表現されているのでは

ないとも言える。コンディヤックは、フィクションないし小説を想像力の産物、先に触れたような想像力とは別の、私達の好きなように à notre gré 観念を結合する想像力（E, Ⅰ：Ⅱ；75, note）の産物であるとしている。選択によって好きなように原型観念を作るのは、分析ではなく想像力だったのである。非現実や理想を語ることは分析の仕事ではない。もっとも想像力さえも、現実から掛け離れたフィクションを作り出すことは許されていない。「自然や私達の認識や先入見との類比関係にある時には、フィクションはよい。しかし想像力がそれから離れると、もはや異常で常軌を逸した観念しか生み出さない」（E, Ⅰ：Ⅱ；90）。

原型観念は、実例に先立って作られなければならないのと同時に、現実的でなくてはならない。結局、原型観念と現実との関係についての問題は、コンディヤックが分析の例をひとつしか挙げていないことから、解かれずに残る。彼は「勇気」しか分析していないのである。もしたとえば「名誉」という原型観念が分析されていたら、分析が何を示すのかが少しは明らかになっていただろう。というのも、個人的な行為の分析よりも社会的事象の分析の方が、現実との関係をよりはっきりと示しそうだからである。もし「名誉」が分析されていたならば、「名誉」は自己あるいは他者からの称賛ないし評価の観念を含むことになっていただろう。その場合コンディヤックは、特定の行為を称賛する人々をどこから導いたであろうか。（想像力からの助けと共に）ひとつの社会を想定し、想定された人々を「名誉」観念に参加させただろうか。それともいつかどこかに生きていた人々が参照されたであろうか。

注

コンディヤックの『人間認識起源論』（Etienne Bonnot de Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, Galilée, 1973）の略号を“E”として、“Première Partie, Section Seconde, §3”を“E, Ⅰ：Ⅱ；3”のよ

うに表した。

また『論理学』(*La logique ou les premiers développements de l'art de penser*, Œuvres complètes Tome XV, Slatkine Reprints, 1970) の略号を"L"として、略号の後にページ数を付した。

1) コンディヤックは、デカルトがしたように感覚を三つの段階（種類）に分け論じている。コンディヤックによれば、人間が思い描くものである限りにおいては単純観念には全く誤謬はない。ただ、その観念が外的事物に実際に属していると判断する時に誤謬が生じ得る（E, Ⅰ：Ⅱ；11)。
2) コンディヤックにおける魂の生成と記号の生成との相互作用のあり方が問題とされることがある。魂の諸能力の生成と諸記号の生成との関係に循環があるというのである。しかしこの問題の詳細はさしあたり本稿の問題ではない。
3) コンディヤックは『起源論』の箇所によって、分析がさかのぼるものについて、観念の起源であるとも物事の起源であるとも述べている。両者の間に区別はないようである。

また、『論理学』を読むと、コンディヤックが分析という用語にふたつの異なった操作を意味させていることが分かる。ひとつは『起源論』において例示されるような操作である。そこでは記号の過去の用法への参照は含まれない。もうひとつは語源学的操作、つまり原初の言語 première langue における語の意味や使用法を参照することによって語の起源を探ることである。多くの場合、コンディヤックは前者の意味で分析について語るが、『論理学』で誤謬論を展開する際には、後者の意味での操作として分析という用語を用いることもある。たとえば、後者の意味での分析とは 'substance' の語源を探り、'ce qui est dessous' という語義を掘り起こす操作である（cf. L, 415)。「分析によって、語が最初に使用された時のその最初の語義を私達が探すようになった時、私達は語を使用することが出来るだろう」(L, p.422)。
4) J. Derrida, 《L'archéologie du frivole》, p.38. in "*Essai*".
5) 計算と人間の行為にかかわる複合観念の分析とは別のものだとする解釈があることを付け加えておくべきであろう。N. ルソーによれば、コンディヤックは代数言語を言語構造のモデルとしたのではなく、類比関係によって他のあらゆる学もそれぞれ固有の分析の言語を知るべきだと示したのである。Cf. N. Rousseau, *Connaissance et langage chez Condillac*, Librairie Droz S. A., 1986, pp. 291–2.

6) J. Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, Dent, 1961, Book4 Ch. I, 2.

7) *Ibid.*, Book4 Ch. I, 3.

8) *Ibid.*, Book4 Ch. I, 5.

9) *Ibid.*, Book4 Ch. II, 1–2.

（大学院後期課程学生）